App.3 A wooden quiver unearthed from Ho-u tomb, GyeongJu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otani, Ikue メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00059503

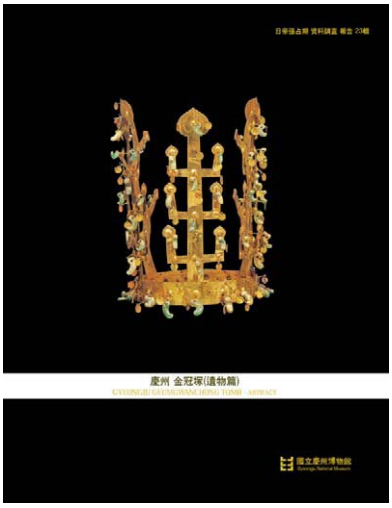
This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

告書の報告本文で個別に解説されているのは「古蹟23328」のみである。参考のため該当部分の訳出を付記しておく。

『慶州金冠塚（遺物篇）』15 頁：

48. 金銅漆器蓋片 (図面 4, 図版 4) －古蹟 23328

蓋を木製で作成し、外面に金銅板を被せており、蓋身の一部が残っている。木製部分に被せた金銅板は円頭釘で固定した。他の金銅製盒の蓋のように、蓋身中央に花弁三弁が広がった形態である。木製部分には漆塗りした痕跡が確認された。[残存高 1.7cm, 残存長 6.1cm]



付 3：

壺杅塚で出土した鬼面の盛矢具

大谷育恵

本特集の冒頭論文「茶戸里遺跡出土漆器の漆技法の特徴－漆塗膜の構造解析を通した漆技法の研究－」において、三国時代の漆器で漆塗膜断面の顕微鏡観察が行われた資料に壺杅塚で出土した鬼面の盛矢具 (胡籙(ころく)) がある [本号 ,p.9]。論文中に「鬼面の盛矢具 (木心漆面)」とあるように、報告の段階では疑問があるとしながらも、用途は面として報告されていた遺物である。論文中に図版の掲載がないため、原報告の該当部分とともに参考のため付記しておく。

『慶州路西里 壺杅塚と銀鈴塚』43~46 頁：

（五）その他

(1) 木心漆面 (図版 45,46)

今回の発掘品の中でも最も注目に値する遺物である。出土位置は西側であり、その場所から鉄斧と鉄製の有棘穂袋武器が発見された。

漆面の構造はまず木で作った上に漆塗りしたもので、眼球は玻璃でその虹彩に該当する部分のみは青い光を有している。そして目は黄金環で囲んでおり、写真にはよく表れていないが 2 本の角が表現されており、その角は腐食が甚だしく、外観は詳細には推測できないことが遺憾である。写真に見えるように、この面は左が右よりも長めに突出しており左右同形ではないが、本来は右も左のように伸びていたはずであり、上からの圧力が加わったことでこのような外観になったものである。角と角の間の漆面上部の縁をなす部分は鉄でできており、その上に黄金で点を刻み入れている。面とはいえ 1 つも穴が開けられた場所がないため、顔面に付けると見ることができず、したがって実際には胸のようなところに付けたのではないかと考えられる。また胸に付けたのでなければ、あえて人が着用したとは考えず、独立した仮面と考えることもできる。

この面の性格に対しては、これはすでに『周礼』夏官にみえる方相氏の面であると考えられる。

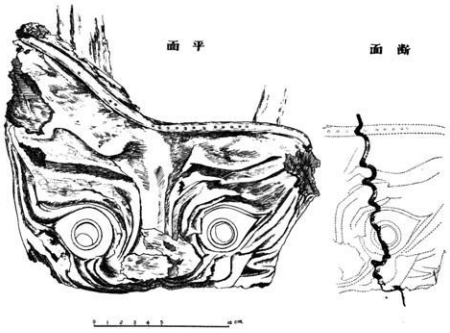
『周礼』

方相氏掌蒙熊皮、黄金四目、玄衣朱裳、執戈楊盾、帥百隷而時難、以索室駆疫。大喪先柩、及墓、入壙、以戈撃四隅、駆方良。

……(以下方相氏に関する記述がつづく)

原載：

金載元(キム ジェウォン) 김재원 1948『慶州路西里 壺杅塚 과 銀鈴塚』(国立博物館古蹟調査報告 第 1 冊), 乙酉文化社 .

公開先（韓国国立中央博物館 HP）：

https://www.museum.go.kr/site/main/archive/report/archive_5655